Nostalgic Town HAKODATE

「実家は五稜郭の近くなんです。そう、函館の」
　くぼみに流しいれた生地の中に、さいの目に切った蛸を二人で放り込む。キャベツ、天かす、紅生姜を全体に振りかけ、千枚通しでひっくり返す。
「えー、そうなんですか。わたしの兄も同じ学校ですよ！学科は違いますけど」
　コロコロと返しを繰り返すと綺麗な球形に焼きあがる。
「えっ、やだやだ、やめてください！絶対、探さないで下さい」
　彼女は笑うと左の頬だけに笑窪ができる。
※
「えっ・・」
　タコ焼きを返す手が止まったように見えた。
「そう、実習で忙しくなるならしょうがないですよね。さみしくなりますね。たまには顔を見せてくださいね。手紙書きます」
　2年の春、僕はバイトを辞めた。
※
　冬。手紙が届いた。
　就職活動のためタコ焼き屋のバイトは辞めたと記されていた。就職も地元函館に決まり、今はレストランでウェイトレスをしているという。レストランのディスカウントチケットが同封されていた。

　レストランはコンビニの2階に位置する小さなお店だった。
「いらっしゃいませ」
　来てくれて嬉しいです、と笑顔で席に案内される。制服がよく似合う。
「ここのシェフ、腕はいいみたい。結構美味しいですよ。でも、盛り付けのセンスがちょっと・・」
　同僚と目を合わせ、いたずらっぽく微笑む。
　料理を運んでくると、話したいことが沢山あるの、と向かいの席に座る。良いのだろうかと思ったが、客は僕一人。次の客が来るま

では大丈夫なのだろう。僕が辞めた後のタコ焼き屋の事、就職活動の事、ソ連がアフガニスタンから撤退した事、仕事への不安など、いろいろ話をした。
　デザートも食べ終え、席を立つ。
「来月、函館に帰ります。函館に来ることあったら連絡くださいね」
　短大の 2 年は短い。
　　※
　夏。資格試験受験のため仙台へ行った。
　バイクで行ったせいだろう、結果は散々だった。
　失意のままバイクにまたがり国道 4 号線を北上する。途中、青森訛りの白バイ警官に止められ青色の紙を頂戴しつつも、野辺地港から無事フェリーに乗船。数時間揺られ函館に上陸した。
　公衆電話を探した。見つけると工藤静香のテレホンカードを差し込み、アドレス帳片手にプッシュボタンを押す。数回のコール音の後、男性の声が受話器から聞こえてきた。父親だろうか。まだ仕事から帰っていないとの返答。改めて掛けなおすことを伝え電話を切った。
　駅周辺を散策しながら時間を潰し、再び電話する。コール 1 回で繋がった。女性の声。
『もしもし、今どこですか？もしかして函館？』
　仙台の帰りに立ち寄ったことを伝える。
『いつまで居ますか？・・じゃぁ、明日会えませんか？』
　仕事は休みだという。オートバイで来ないでくださいね、ヘルメット持ってないから、また明日、と彼女は言い、函館駅前で待ち合わせることを約束し電話を終えた。

　サウナの休憩室で一夜を過ごし、函館駅に向かった。
　待ち合わせ 10 分前に到着したが、すでに彼女の姿はそこにあった。ピンク地のカットソー、膝上丈のホワイトデニムスカート、白のスニーカー。ライトブラウンのポシェットを斜め掛けにしている。僕を認めると、頭の上で大きく手を振った。
　左の頬に笑窪がうかんでいる。

「久しぶりです。元気でしたか？」
　今日はわたしに任せてくださいと、電車の回数券を渡される。遠慮すると、まだ学生さんでしょ、わたしは社会人なんだから、と何故か怒られた。ここは素直に従った方が良いようだ。
　函館駅前から路面電車に乗り、谷地頭電停で降りる。啄木一族の墓を横目に南へ 15 分程歩くと、そこは立待岬だ。函館山の南端に位置し津軽海峡が一望できる。風が心地よい。
「あれー、いつもだと青森が見えるんですけど・・」
　と、ぴょんと飛び跳ねる。高さの問題では無いと思うのだが。
「でも、ここって飛び降り自殺の名所なの」
　口元に片手を添え、何故か小声で教えてくれる。
「遊歩道を歩けば岩浜まで降りれますよ。飛び降りるより時間かかりますけど」
　微妙に笑えない冗談を聞きながら、岩浜まで降りる。水辺でちゃぷちゃぷしたいと言って靴を脱ぐと、裾を少しだけ持ち上げ海に入っていく。僕も靴を脱ぎ海に入った。今年初の海水浴！ということにしておこう。
　谷地頭電停まで戻り路面電車に乗る。谷地頭から二駅、宝来町電停で降りて西へ歩くと函館山ロープウェイ乗り場に着く。函館山に登り函館市内を眺める。まだ午前中であり当然夜景ではないが、その眺望はやはり美しい。美しさの要因の一つとして、あの独特なクビレがある。あのクビレを“北海道の持つところ”と勘違いしている人も多いようだが。
　函館山を下り、日暮し通を北西に歩く。函館聖ヨハネ教会、ハリストス正教会を見学し、さらに北西へと進むと、洗剤の CM で有名な八幡坂にたどり着く。八幡坂から函館港を二人で眺める。背後には、北島三郎が中退した函館西高がある。
　さらに北西に進むと左手に旧函館区公会堂が見える。青と黄色のコントラストが美しい。元町公園を抜け、基坂通へ出る。右手に旧イギリス領事館、左手にペリー提督来航記念碑を見ながら港の方向へ歩く。ジョン万次郎も幕府老中からスパイ容疑をかけられなければ、ペリーと共に函館に来ていたのかなぁ、などと歴史に思いを寄

せる。弁天末広通を右に曲がり八幡坂まで戻る。左折し港まで下り、金森赤レンガ倉庫街を散策。七財橋から港を眺めながら休憩した。
「暗くなるともっと綺麗ですよ。夜にも来たいなぁ」
　海を眺めながら、そう呟くように言うと、なんかお腹減りましたね、とこちらを向いた。何か食べたいものありますかと聞く。
「えっ、ハンバーガーが食べたいの？」
　うんと、頷いた。正解は五島軒のカレーだったか。
「知らないんですか？ファストフードは、女の子の敵なんですよ」
　そう言い、先に歩き出す。立ち止まってこちらに振り返ると、笑顔で手招きし、ラッキーピエロに向けて駆け出した・・
　　※
「・・・さん！どうしたんスか、ぼーっとしちゃって。昔の女の事でも考えてたんスか？函館の女（ひと）by サブちゃん、なんちゃって」
　おしぼりを投げつける。
「すんません。お疲れなんですね」
　出番は明日なので、それほど疲れてはいない。
　活イカの刺身をつまむ。やや小ぶりだが旨い。しかし、不漁の影響だろう、時価だ。
「今年ってイカ、不漁なんですよね。函館の学会で楽しみにしてたんスけどね。やっぱり、黒潮の大蛇行の影響ですかね」
　黒潮の大蛇行で影響を受けているのはシラス漁だ。おそらく海水温が影響しているのだろう。
　さんまの刺身もつまむ。脂がのっていて、これも旨い。
「えっ、そうなんですか？！ジョン万次郎って、黒潮の大蛇行があったからアメリカに渡ったんですか？」
　1841 年、万次郎が 14 歳の時、土佐の国の沖へ漁に出たが遭難。通常の黒潮の流れであれば、北方に流され命が無かった可能性が高い。しかし、何故か伊豆諸島の無人島鳥島に漂着し命が助かった。黒潮が大蛇行していため、南方へ流されたと推察される。鳥島でサバイバル生活をしていたところ、アメリカの捕鯨船ジョン・ハウランド号に救助される。ここから万次郎の数奇な人生が始まるのだ。

「いやー、そうだったんですね。勉強になります」
　黄色くて泡が出ていて飲むとフワフワした幸せな気分になる不思議な飲み物をグイっとあおる。ビールと言うらしい。
　函館の海鮮に舌鼓を打ち、塩ラーメンを味わい、ビールと言う飲み物を満喫し、函館の夜を堪能した・・。
※
　助手席に鞄を放って、ドライバーズ・シートに腰を沈める。イグニッションキーを回すと、数秒震えたのちマシンが咆哮する。ギアをローに入れアクセルを踏み込むと、後輪から白煙を上げながら発進した。
　函館の学会は終了した。この街ともしばしお別れだ。
　ウィンドウに流れる風景はあの頃と違って見える。街が変わったからか、それとも僕が変わったからだろうか。
　カーナビに目を向けると、時刻は 14 時を示していた。函館でランチしておくか。思い立ってラッキーピエロへ向け、ステアリングホイールを切った。

　店内の混雑はさほどでもない。一番人気のメニューを注文して席に着く。ブランコの席には、さすがに座らない。
　女の子の敵にかぶりつこうとした時、右手に座っていた女性と目があった。
「えっ・・、うそ・・、会いたかった」
　彼女の左頬に笑窪が浮かんだ・・

　Nostalgic Town HAKODATE

　了

　作中に登場する人物等は、すべてフィクションです。